

研究センター長の1年を過ごして

竹宮恵子（国際マンガ研究センター長）

2018年4月より、国際マンガ研究センター長を拝命することとなり、この国際案件の多いセンターの長が自分に務まるのか自問自答しつつ任に就いている。ほぼ11ヶ月が経ったが、目まぐるしいほどに様々な案件が通りすぎてゆく日々に、新鮮かつ驚愕の思いを抱いている、というのが正直な感想だろう。

これまで10年間、私は一教員、一漫画家として、他の同じ立場の人よりは比較的高い頻度でこのミュージアムに関わってきた。漫画家としてイベントに出演することや、自分の研究から始まった原画'（ダッシュ）プロジェクトで色調整の確認を行なうためにミュージアムに赴くことが殆どであったと言える。しかしそれは依頼を受けてのことであり、ミュージアムの沢山の企画の中のいくつかは、ごく浅く関わるのにすぎなかった。バックヤードを知ることもなく、いつも快適な、親近感のあるおもてなしを受ける側だったのだ。それが新たな任によりその裏側、運営を任される実務者の会議、そしてその中で展示の工夫や企画実行の可否の判断など、かなり難しいところを、それぞれの担当者が的確な（そして実際的な）『読み』をもとに、短い時間の中で可能な限り良い結果を求める姿を確認することとなったのである。

今や世界から注目される国際マンガミュージアムは、こんなに距離の近いテーブルで会議が行なわれ、それぞれの担当者がはっきりとした方針と意見を持って、短い時間の中で日常的に相談と決定を繰り返している。うっかり聞き逃すと、センター長の自分が日程をメモし忘れていたりして、メンバーに余計な迷惑をかけてしまったりする。館員にとってそれが仕事といえばそれまでだが、少ない人員で行なわれる明快な結論の出し方は、責任を持つ担当者の覚悟がよく見えて気持ちが良い。もちろんそれは最短で日々の結果につながっていき、良い展示が良い結果と評判を呼んでいくことに、はっきりと現れる。それゆえにこそ緊張感ある選択が出来るのだ、とも言えよう。一人一人のスタッフが充分な責任を与えられ、各個がそれを充分に認識しているとき、チームとしての力は最大限に大きくなる。理論上は誰でもがそれを理解していても、どのチームでもそれが可能な訳ではない。だが、マンガミュージアムはそれが出来るチームであると確信している。

研究センター長としては、原画アーカイブ・プロジェクトの進展を、見守りつつ推し進めるのがこれからの仕事と考えているが、もちろんこれには文化庁からの

支援も必要であり、原画を取り扱う人材も重要な要素となるため、人材育成も含んだ一連のプログラムを作っていく必要がある。原画アーカイブはこれまでの企画のほかに新たに加わるプロジェクトで、かつ大きいものなので、チームスタッフにとっては荷重のかかる仕事になるだろうと思われるが、その重要度は間違いなく高い。道のない場所に道を作りながら進んでいくような活動が必要になるのだが、これまで10年、おそらく初めてのことばかりだったのであろうマンガ展示や、国際学会の実行に関して、既にチームはそれぞれ実績を積み上げてきている。新たな企画にも、おそらく相応の未来予測と実行力を持って、道を作っていけるものと期待する。

マンガという分野は学問においてはまだ新しく、専門の研究者の数もまだまだ少ない。母体である大学においては研究者を育て、当研究センターはその学問を披瀝する場所と考えたいところだが、絶対的な研究者の揺籃とまでは行っていないのが現状である。それでも、まだ新しい学問領域だと言いながら最初からこうした施設を持ち得たのは、マンガ・パワーのなせる技であり、自身の力で世界に拡大していったマンガであればこそなのである。その分、我々関係者はその恩恵をただ受けるだけでなく、正しく関わることでそのパワーを倍増させるべく動きかけなくてはならない。正しく、とはどういうことか。それぞれマンガを愛し、集まってきた者たちであれば、それは容易にわかる。どの企画を推し進めるのが身の丈に合っているのか、どう工夫したら似通った2つの企画をひとつにまとめ、より大きく輝かせられるのか。結論の着地点はいつも「マンガへの貢献」ただひとつ。ここはただの職場ではない、夢を育てられる場所になっている。

最後に、ひとつ言っておきたい。このミュージアムへの外部からの評価は大きく、特に他国から大きすぎるほどの期待を寄せられており、時には断らざるを得ない企画も寄せられる。理由として人的な不足が最も大きい、それは経済的な事由に因るものであり、多大な人気寄せられる施設であっても、その運営は決して資金豊かではない。文化的なことに弱い面がある日本では珍しいことではないが、京都という街の真ん中に位置するオアシスのようなこの施設に、何かのかたちで支援を送るシステムが作れないのかとひそかに願っている。

2018 年展示企画回顧

「ビッグコミック 50 周年展 ～半世紀のビッグな足跡～」について

呉智英（国際マンガ研究センター顧問）

2018 年もいくつかの展示が行われたが、「ビッグコミック 50 周年展—半世紀のビッグな足跡—」（6 月 9 日～9 月 2 日）はとりわけ重要なものであった。創刊 50 周年を迎える同誌の歴史を 200 点の原画（一部複製原画）で一覧できるもので、全国巡回の第一歩となった。

『ビッグコミック』（小学館）は 1968 年 4 月号（発売は 2 月末）が月刊誌として創刊され、翌年から月 2 回刊になり今に至っている。『ヤングコミック』（少年画報社 1968 年 6 月創刊）と並んで、雑誌名に「コミック」という呼称を使い始めた先駆誌の一つである。これは従来の諷刺漫画・児童漫画との違いを強調し、大人の読むに耐えるストーリーマンガを掲載するという意図を込めたものであった。『ビッグコミック』はその後『ビッグコミックオリジナル』『同スピリッツ』他の姉妹誌を生み、今も人気誌の一つとなっている。

とりわけ、さいとう・たかを「ゴルゴ 13」は 1968 年 11 月から連載が始まり、2018 年には 50 周年を迎えた長期連載作である。また、手塚治虫も常連作家であったが、ちょうど作風を変える時期にも当たり、今回原画展示した「地球を呑む」は初期手塚マンガ最後期の作品でもある。「ドラえもん」で国民的人気マンガ家となった藤子・F・不二雄には、大人向けの辛辣なブラックユーモア短編が何作かあるが、それらのほとんどが『ビッグコミック』掲載作である。今回は「ミノタウロスの皿」の原画を展示した。

本展開催中、2 つの関連対談イベントがあった。

1 つは 6 月 9 日に開かれた石塚真一・さそうあきらトークセッションである。石塚は現在『ビッグコミック』誌上に「BLUE GIANT SUPREME」を連載中である。これはジャズ奏者の青年の物語だが、やはり音楽をテーマにした「神童」などの作者であるさそうあきらとの対談が実現した。さそうは『ビッグ』本誌連載はないものの姉妹誌『ビッグコミックスピリッツ』に「俺たちに明日はないッス」を連載したことがある。

もう 1 つのイベントは 8 月 4 日に開かれた齋藤なずな・呉智英対談である。齋藤は寡作な作家であるが、2018 年 3 月、20 年ぶりの新刊『夕暮れへ』が刊行され、再び注目を集めている。齋藤のデビュー作「ダリア」は 1987 年『ビッグコミック』新人賞を受賞した。以後『ビッグ』また姉妹誌『ビッグゴールド』に短篇を発表してきた。呉智英とは同年齢であり、新人デビューのいきさつ

などで話はずんだ。

「ビッグコミック 50 周年展」は会期を通じて観覧者に好評であり、またマンガ史の理解を深める役割も果たしたと言えるよう。